九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

長谷川，尚人
九州大学大学院、人間環境学府、空間システム専攻、建築史学研究室

https://hdl.handle.net/2324/21679

出版情報：2012-03-12
バージョン：
権利関係：

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

九州大学大学院　建築史学研究室　長谷川尚人

西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

１９３４

西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

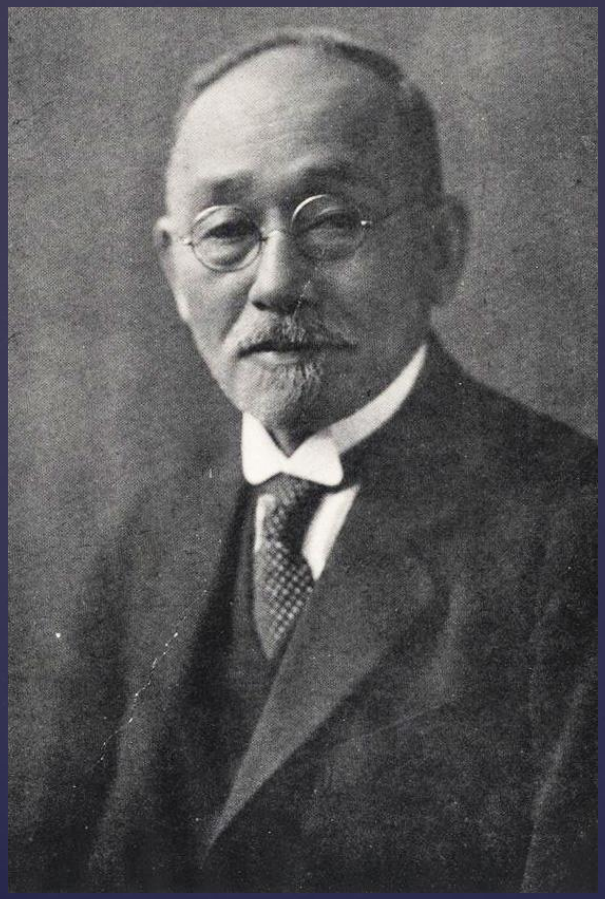
伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

１９３４



西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

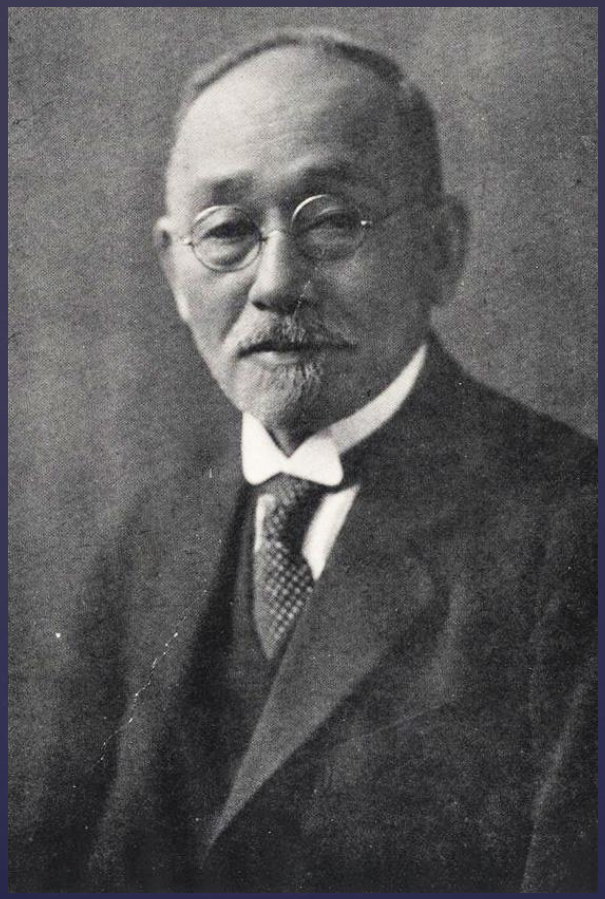
伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

１９３４



西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

１９３４

西本願寺

築地別院

「印度佛教式」

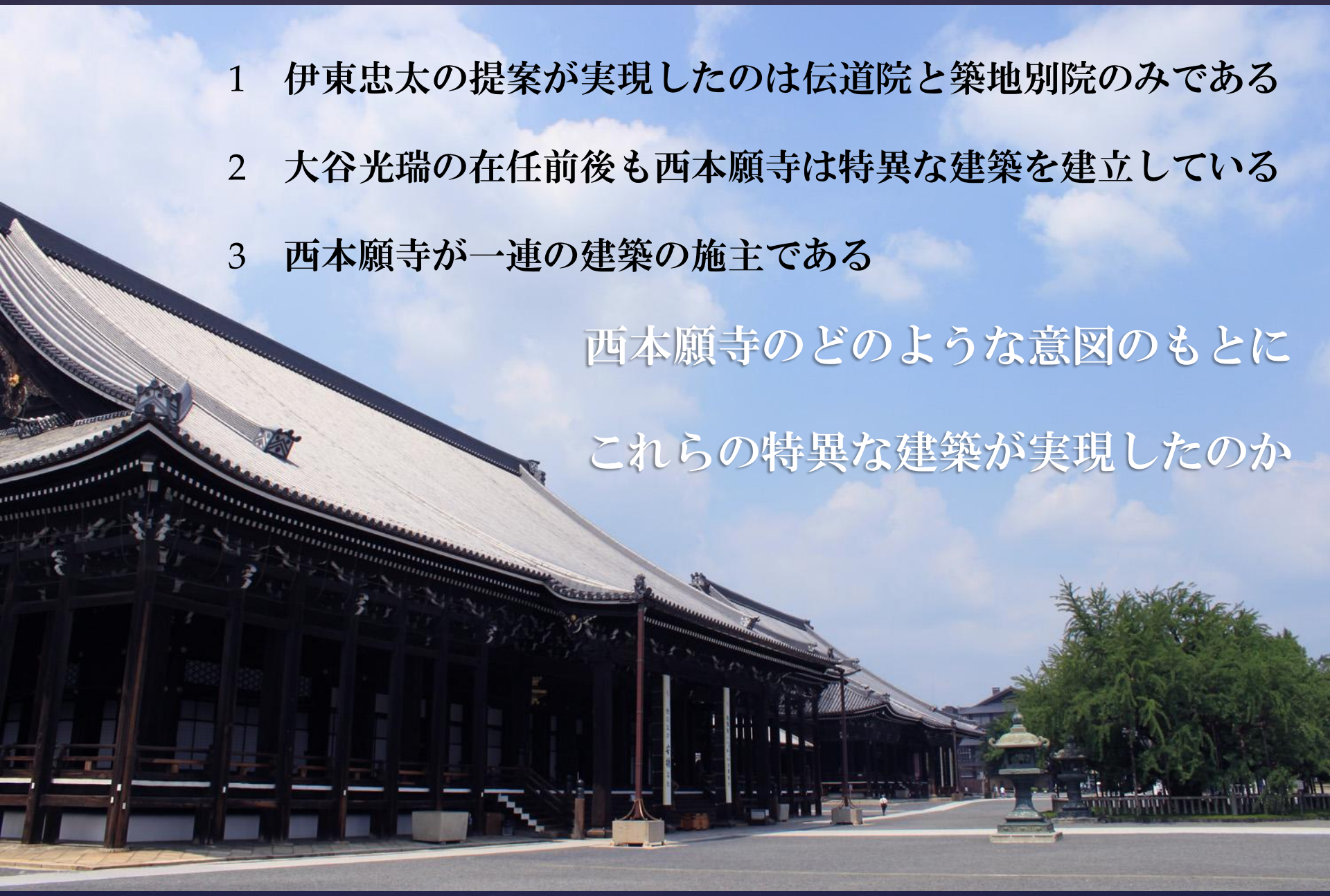
伊東忠太

大谷光瑞

大連別院

鎮西別院

１９３４



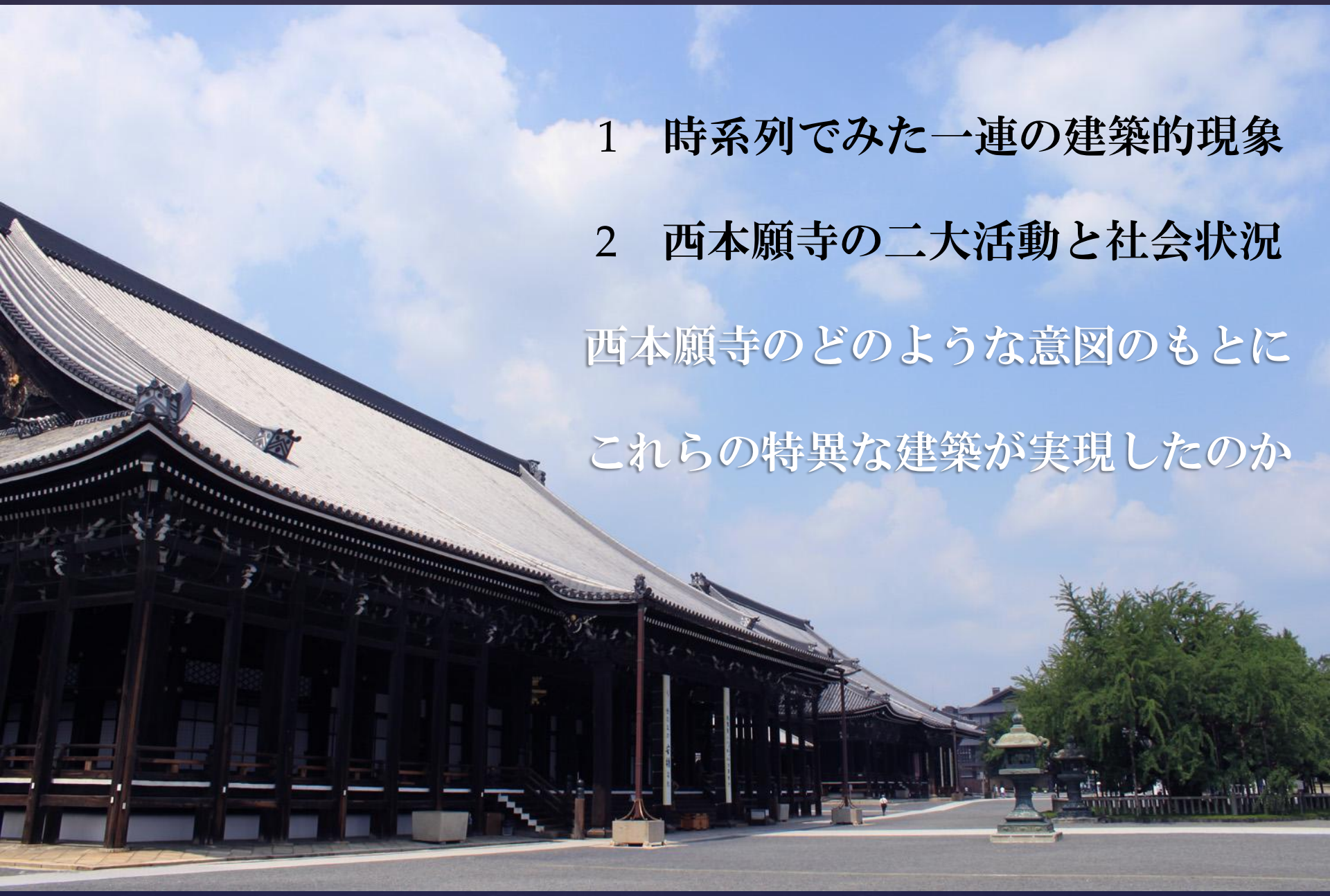
1　伊東忠太の提案が実現したのは伝道院と築地別院のみである

2　大谷光瑞の在任前後も西本願寺は特異な建築を建立している

3　西本願寺が一連の建築の施主である

西本願寺のどのような意図のもとに

これらの特異な建築が実現したのか



1　時系列でみた一連の建築的現象

2　西本願寺の二大活動と社会状況

西本願寺のどのような意図のもとに

これらの特異な建築が実現したのか

大谷光瑞の在任前後も西本願寺は特異な建築を建立している

伊東忠太の提案が実現したのは伝道院と築地別院のみである

光尊寺
1875

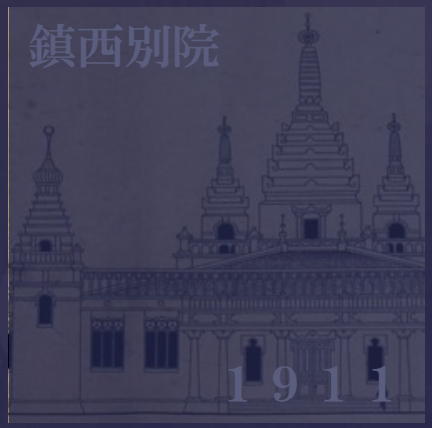
大連別院
1907

函館別院
1908

1908

二楽荘
1909

仙台別院
1910


鎮西別院
1911

伝道院
1912

1918

1930

上海別院
1931

光徳寺
1932

１８７５

光尊寺

オーダー

色ガラス

洋風

本堂

明治初期

大谷光尊

光尊寺
1875

大連別院
1907

函館別院
1908

大泊別院
1908

二楽荘
1909

仙台別院
1910

鎮西別院
1911

伝道院
1912

1918

1930

上海別院
1931

光徳寺
1932

１９０８

函館別院

「御拝」

レンガ造

本堂

独特の迫元

細部

「印度佛教式」

1910

仙台別院

明治建築

本堂

馬蹄形

葱花線

細部

「印度佛教式」

光尊寺　大連別院　函館別院

１９０７　大連別院

１９１１　鎮西別院

細部のみならず「印度佛教式」とした別院も計画されたが頓挫

１９１８　１９２０　１９３１　１９３２

光尊寺　大連別院　函館別院

１９０９　二楽荘

１９１２　伝道院

明治末期、そうした計画は別邸と社屋にしか実現しなかった

１９１８　１９３１　１９３２

光尊寺
1875

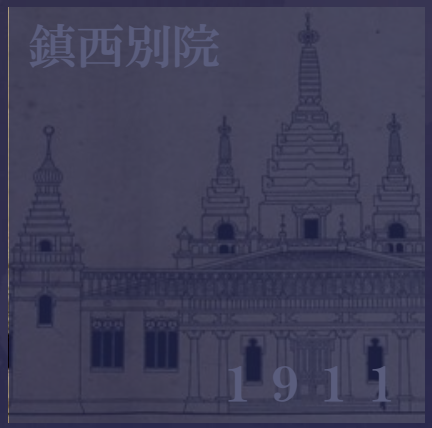
大連別院
1907

函館別院
1908

1908

二楽荘
1909

仙台別院
1910


鎮西別院
1911

伝道院
1912

布哇別院
1918

1930

上海別院
1931

光徳寺
1932

１９１８

布哇別院

ネオ・バロック

左右両塔

中央ドーム

塔屋

「印度佛教式」

光瑞隠退後

光尊寺
1875

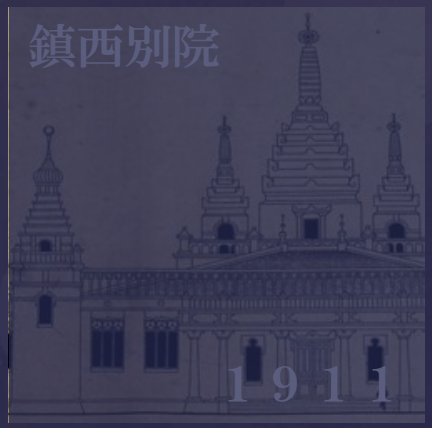
大連別院
1907

函館別院
1908

1908

二楽荘
1909

仙台別院
1910


鎮西別院
1911

伝道院
1912

1918

神戸別院
1930

上海別院
1931

光徳寺
1932

1930

神戸別院

葱花線

ヴォールト

無数の仏龕

五つの尖塔

「印度佛教式」

１９３１

上海別院

独特の迫元

葱花線

ヴォールト

様々な彫刻

「印度アジヤンター式」

１９３２

光徳寺

３基のドーム

開口上部

雲形アーチ

葱花線アーチ

「印度風近世式」

1934

築地別院

古代中天竺

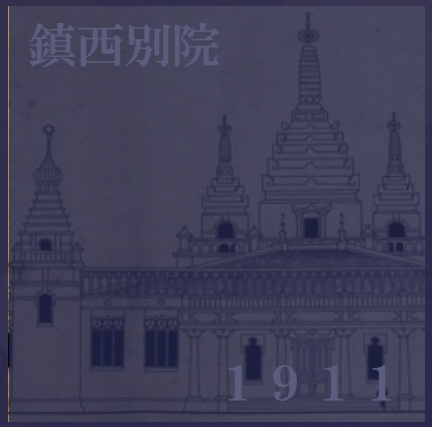
中央の上部と向拝

両翼の玄関

葱花線

「印度佛教式」

明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する



明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する

明治末期、その細部に「印度佛教式」が実現する

明治初期、様式混淆の特異な本堂建築が実現する

明治末期、その細部に「印度佛教式」が実現する

大正期以後、その骨格に「印度佛教式」が実現する

明治初期

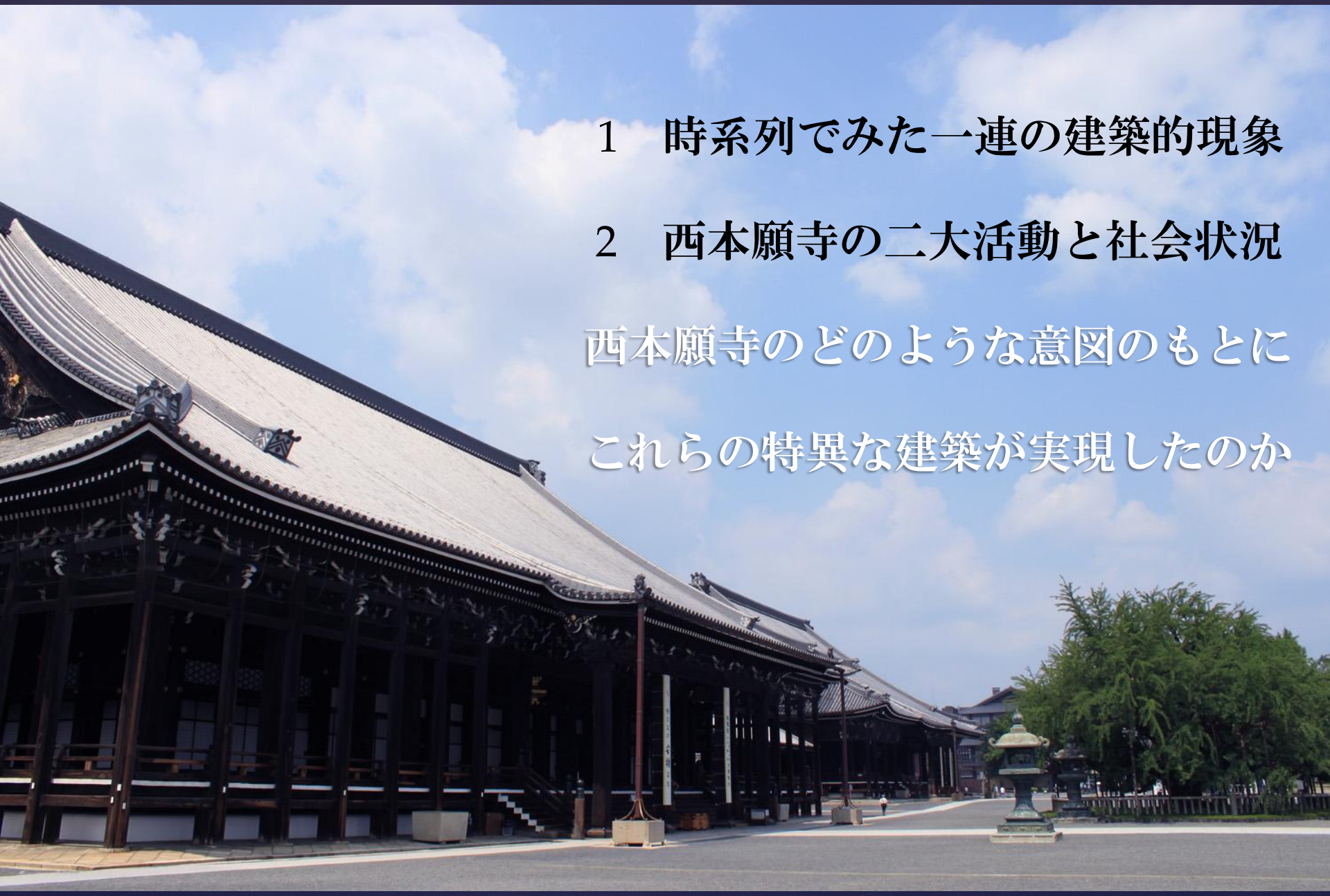
1　様式混淆の本堂建築

明治末期

2　細部に「印度佛教式」

大正期

3　骨格に「印度佛教式」



1　時系列でみた一連の建築的現象

2　西本願寺の二大活動と社会状況

西本願寺のどのような意図のもとに

これらの特異な建築が実現したのか

倒幕にともなう宗門改の喪失と

新政府による神仏分離の影響で

日本最大の仏教教団である西本願寺は

迅速に厖大な門徒を確保するという課題に直面した

教団　「迅速に厖大な門徒を確保したい」

国家　「西本願寺を野放しにはできない」

「仏教を大陸の教化に利用したい」

利益の一致

西本願寺はアジア開教に踏み出す

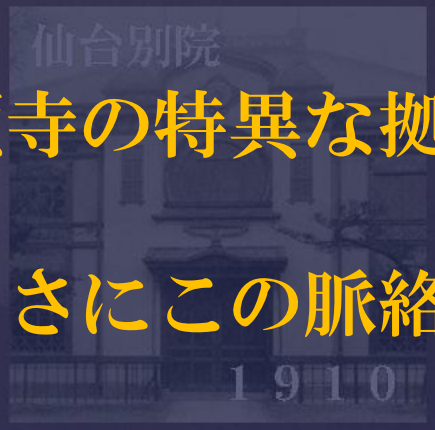
教団　「他の宗派との差別化を図りたい」

新門　「二度の退学の経歴を挽回したい」

「宗主に相応しい実績を造りたい」

利益の一致

西本願寺は大谷探検隊に踏み出す



西本願寺の特異な拠点施設が現れたのは

まさにこの脈絡のもとであった

その兆しはすでに大谷光尊の時代からみられたが

アジア開教や大谷探検隊、日本の大陸進出が

進展するにつれ、「印度佛教式」は汎アジア的

大仏教教団の象徴としての有用性が認められつつあった

すなわち、西本願寺は「印度佛教式」建築を

国内外で厖大な門徒を迅速に獲得するという目的のため

教団の広告塔として建立したと解釈できる

旧来の本堂が本山の相似形であるのに対し

本研究の対象には厳格な意匠形式が示されていない

西本願寺は教義や仏教美術に特化した高度な学識を

有するにもかかわらず、１３の建築に共通するのは

1　在来宗教の拠点施設としては極めて特異であること

2　うち１１の建築が「印度佛教式」意匠を有すること

これを意匠形式の模索とみることもできるが

西本願寺の布教対象が国内外の一般大衆ならば

1　広告塔として衆目を集めること

2　仏教の原点であるインドを彷彿させること

のみを条件に、深奥な学識は意図的に封印したとも

伊東・鵜飼・葛野・岡野・Emory & Webbといった

建築家の独自性は、緩やかな制約のもとで初めて発揮された

これを意匠形式の模索とみることもできるが

西本願寺の布教対象が国内外の一般大衆ならば

1　広告塔として衆目を集めること

2　仏教の原点であるインドを彷彿させること

のみを条件に、深奥な学識は意図的に封印したとも

伊東・鵜飼・葛野・岡野・Emory & Webbといった

建築家の独自性は、緩やかな制約のもとで初めて発揮された

結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厖大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厖大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厖大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厖大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

結論

明治維新以後の趨勢のなかで、教団の存続すら危ぶまれた西本願寺は、アジアにおける権益の拡大を図る国家に追随し、アジア開教や大谷探検隊によって国外にも活路を見出そうとした。近代化を目指す一方で矛盾や軋轢を抱える大教団であったが、拠点施設に特異な建築意匠が現れたのは、まさにこの脈絡のもとであった。その萌芽は既に光尊の時代からみられたが、国策とともにアジア開教と大谷探検隊が進展するにつれ、後に「印度佛教式」と称される建築意匠は、汎アジア的大仏教教団の象徴として、教団内で次第にその有用性が認容されていったと考えられる。要するに、西本願寺の「印度佛教式」意匠を有する別院本堂建築は、国内外で厖大な門徒を直ちに確保するという一義的な目的のもとで、仏教の原点であるインドを彷彿させる、教団の明白な広告塔として顕示されたと解釈できると結論し、擱筆することとする。

近代西本願寺の別院本堂建築における「印度佛教式」意匠について

九州大学大学院　建築史学研究室　長谷川尚人